

ちよっぴりえっちな美少女アヴァニールとまじめなモンジャラのレ
ポート

木村直輝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

くアヴユールとモンジャラのジョウト旅行く

【あらすじ】

ちよっぴりえっちな美少女アヴユールとまじめなモンジャラが、二泊三日のジョウト旅行に！

アサギシティ近くのモーモー牧場で乳搾り体験をしたり、エンジユシティでスズの塔を眺めたり、夜の自然公園で切なくなったり
……。

二人（一人と一匹）の楽しいジョウト旅行のレポートです。

【はじめに】

この二次創作は、木村直輝が個人的に執筆した二次創作です。

また、読まれる方によつて不快に感じる場合がございます（性的な表現？・性的な描写？）。

（♥が付いたお話には、18歳以上の方向けのつづきがあります。）

【マルチ投稿】

「note」を中心に複数サイトで公開中です。

<https://note.com/naoki8888888888>

／n／ncd97led29105

目次

1日目	お昼	アサギシテイ	1
1日目	午後	39ばんどうろ	6
1日目	夜	コガネシテイ	9
2日目	午前中	キキョウシテイ	16
2日目	昼下がり	エンジュシテイ	20
2日目	夕方	エンジュシテイ	23
2日目	深夜	しぜんこうえん ♥	25
3日目	朝	コガネシテイ	29
3日目	午前中	しぜんこうえん	31
3日目	夜	41ばんすいどう？	39

1日目「お昼」アサギシティ

——ここは アサギ シティ

とおく はなれた いこくに

もつとも ちかい みなとまち——

「うくん……い！」

ポケモンセンターから出てきた一人の若い女性が、日差しを浴びてひかえめなのびをする。

二十歳前後だろうか、とてもかわいらしい顔立ちをしている。

ダークブラウンのつややかな髪を低い位置で二つに結んだ彼女の名はアヴユール。

ピタツとしたタートルネックの赤いシャツに白いショート丈のジャケットを羽織り、黄色と黒のショートパンツを合わせている。

「……」

そんなアヴユールのうしろには、一匹のポケモンがいた。

「モンジャラ、お腹空いたね」

「もじゃー」

「ツルじようポケモン」モンジャラ。

アヴユールとモンジャラはこのジョウト地方に、つい先ほど船でやってきたばかりだった。

遠い地方からやってきたアヴユールたちは、まずポケモンセンターを訪れ、荷物を預けるなどして観光をするための支度を整えていたのである。

「じゃあ、予定通り、まずはご飯食べに行こう！」

「もじゃー」

アヴユールはモンジャラの返事を聞くと、首から下げていた小型の電子端末をつける。アヴユールの住む地方で普及している、便利な携帯用の電子端末だ。

「お店は……えーつと……あつちー……かな」

「もじゃっ」

歩き出すアヴユールについて、モンジャラも歩き出す。

「ジヨウト最初のご飯はねえく……、何だと思う？」

「もじやあ？」

「なんと、洋食です！」

「もじやつ」

「港町だから海の幸かなあ〜って思ったんだけど、港町と言えばもう一つ！ 洋食が熱いんです！」

「もじやー」

「ほら、港町って色んな国の文化が入ってくるでしょ？ だから、洋食屋さんもいっぱいあるみたいなの」

「もじやあ……」

「それに、アサギは牛肉が有名じゃない？ ということで……」

「まずは、ビーフシチューを食べに行きたいと思います！」

「もじやー！」

「って言っても、アサギ牛は流石に高いから、普通の牛肉なんだけどね……」

「もじやあ〜」

「アヴユールとモンジャラは楽しそうに話しながら、港町を歩いていく。」

遠くには先ほどまでアヴユールたちが乗っていた大きな客船が停泊しており、他にも何隻かの大型船舶が見える。そして、東の方にはひときわ目立つ大きな塔が立っていた。

「ねえ、モンジャラ。あれ見て！」

「もじやつ？」

「アサギのとうだい」だよ？ すごいねー。おつきー！」

「もじやー……」

アサギシティの南東には、アサギのランドマークとも言える高い灯台が立っている。別名、アサギのとうだい。

「アサギシティではね、昔からポケモンが夜の海を照らしてたんだって。それを祀^{まつ}って出来たのがあの灯台らしいよ？」

「もじやー」

「今でもあの塔の上にはポケモンがいて、海を照らしてるんだって。すごいね!」

「もじゃー!」

「ご飯食べ終わったら、一緒に写真撮ろう!」

「もじゃっ!」

アヴユールたちは灯台から視線を戻し、海から離れて街の奥へと入っていく。

「この辺は意外と都会、って感じだね?」

「もじゃー」

「えーっと、お店は……あっちの方かな」

「……」

「あつ、ねえ。ビーフシチューの後は、ちよつと海を見ながら休憩しない?」

「もじゃー」

「洋食の後は、ケーキがいいかなあつて。えっと、待ってね……。ほら、これ!」

周囲を確認してから、道の端でかがんで電子端末の画面をモンジャラに見せるアヴユール。手の中の画面には、断面が整えられていないふわふわのスポンジに、赤いイチゴと白いパウダーシユガーが乗ったかわいらしいケーキが映っている。

「これ! シンプルだけど、美味しそうですよ」

「もじゃー!」

「このケーキを買って、『アサギのとうだい』の写真撮って、そのあと海を見ながらちよつとだけ休憩しよつか?」

「もじゃー」

「その前に、まずはお昼ご飯だね」

楽しそうにお喋りしながらしばらく街中を歩いたアヴユールたちは、ついに目的の洋食屋さん^{まちなか}に辿り着く。

「ここだ! 意外と小さいお店だね。カフェみたい」

「もじゃー」

「ちようど席、空きそうだよ。先、入っちゃおつか」

「もじやっ」

会計を終えた先客と入れ違うようにお店に入ったアヴユールたちは、間もなくカウンター席に通される。少し薄暗い店内が、落ち着いた雰囲気かもを醸し出している。

ランチメニユーもやっていたが、アヴユールは最初から決めていたお店の定番メニューである。『ビーフシチュー』を注文した。

「このお店の先代さんは、船乗りでコックさんだったんだって」

「もじやー……」

「その先代さんのソースを受け継いだ、歴史のあるドウミグラスソースがこのお店の売りらしいの」

「もじやー」

「楽しみだねっ」

「もじやー!」

期待に胸を膨らませながら楽しく談笑するアヴユールたちの前では、店主が慣れた手つきで料理を用意する。それを手伝うのは奥さんたちだろうか、それとも熟練のスタッフだろうか。間もなくアヴユールとモンジャラの前に、サラダとライス、そして平たい皿に盛られたビーフシチューが運ばれてくる。

「わ……、美味しそー!」

白い湯気を上げるビーフシチューは、スープ皿ではなく平たいお皿に盛られている。

ステーキのように真ん中に盛られた牛ほほ肉の上に、たっぷりのブラウンソースのようなシチューがかかっており、その周りをマッシュポテトで作った土手が囲んでいる。

「いただきますー!」

「もじやー!」

手早く写真撮影を済ませると、さっそく、まずは普通にビーフを一口ほおばるアヴユール。

「ん……」

ほろ苦い風味が口に広がる。塩気の強い濃厚なドウミグラスシチューが、ナイフで切るのも難しいほど、ほろほろとした肉を包みこ

んでいる大人な味だ。

次は、海の波のようにうねったマツシユポテトの土手を一口食べてみる。

「んー……」

ほのかな塩気となめらかな口触りのポテトがクリーミーで、口にした時はねじれていたポテトが口の中でほどけていく。

「……モンジャラ。ナイフ、ちゃんと使えてる？」

「もじゃっー！」

ツルで器用にナイフとフォークを繰るモンジャラを、アヴユールは笑顔で見つめる。

「じゃあ、塗ってみようか？」

「もじゃー！」

アヴユールたちは、今度はナイフにポテトを取ると、それを一口大に切った牛肉にバターのように塗ってから口に運んだ。これがこの店のおすすめの食べ方なんだそうだ。

「……んー！ 美味しい……」

少し塩気の強いシチューとなめらかな口触りのクリーミーなポテトが混ざり合うことで、口の中で絶妙な味のバランスが完成する。ほろほろとした肉の旨味を逃さないように噛みしめ噛みしめ、アヴユールは飲み込む。

「ふう……」

アヴユールは隣を見る。小さな体で懸命にナイフとフォークを使い、おんなじ料理を食べるモンジャラがいる。

「……もじゃあ？」

「ふふ。美味しいね」

「もじゃー！」

うれしそうに返事をするモンジャラに、アヴユールは優しく微笑む。

昼時のアサギシテイで、一人と一匹は、海のようなしお気を感じながら穏やかな昼食を楽しんだ。

1日目「午後」39ばんどうろ

——モーモー ぼくじょう

うまい しぼりたてミルクを どうぞー！——

「モンジャラ、面白かったね！」

「もじゃー！」

お昼ご飯を食べ終えたアヴユールとモンジャラは、アサギシテイから北に伸びる“39ばんどうろ”の“モーモーぼくじょう”を訪れていた。

「正直最初はちよつと怖かったけど、お姉さんもミルクも優しかったね」

「もじゃあ」

アヴユールとモンジャラはこの“モーモーぼくじょう”で、乳搾り体験を楽しんだところだった。

「でも、モンジャラにお乳しぼられて、ミルク。ちよつとくすぐつたそうだったよね」

「もじゃ……」

モンジャラの表情がぴたつと止まる。つい今し方の出来事を思い出して、よみがえってきた申し訳なさに大人しくなる。

モンジャラの全身をおおうブルーのツルには細かな毛が生えているため、ツルで触られるとくすぐりたいのだ。

「ふふ、モンジャラったら」

「もじゃあ……」

「ねーえ、モンジャラ」

「もじゃ？」

「ミルクのおっぱいさあ。あつたかくて、ピンク色の、綺麗なおっぱい。血管が浮き出でて、ぎゅって握ると真っ白なお乳がびゅーって出て……」

アヴユールはそう言いながらしやがみこむと、モンジャラの側面に顔をよせ、ささやいた。

「ちよつとえつちだったね」

「もじやつー！」

びくつとするモンジャラから顔を離し、アヴユールは笑う。

「ふふふ。モンジャラ、動揺しすぎ。ふふ、ふふふふふ」

「もじや、もじや……、もじやつー！」

突然アヴユールに抱きかかえられ、モンジャラは驚いて鳴き声を上げる。

そんなモンジャラをアヴユールは胸にぎゅーっと押しつけるように抱きしめると、いたずらっぽい笑みを浮かべて歩き出した。

その口元を、モンジャラに近づけて、小さな声でささやきながら――

「ねーえ。モンジャラは、思わなかったの？」

「……もっ、もじやつ」

「なんで？ だって、おっぱいだよ？ ミルタンクの、女の子の、おっぱい……」

「もっ、もじや！ もじやー！」

モンジャラは否定するように、強い鳴き声を出す。

「ふーん……。じやあ、これは？」

そう言うと、アヴユールは自分の慎ましやかな二つのふくらみをモンジャラにこすりつけるように、ゆっくりモンジャラを動かした。

「もじやつー！ もじやつー！」

「んー？ どうしたのー？ だって、モンジャラはおっぱい。別にえっちだと思わないんでしょー？ そうだよねー？ だってモンジャラ、植物だもんねー？」

「もじやつー！ もじやもじやー！」

「ふふ、ふふふふ。……はあ。……んっ、おしまい」

そう言うと、アヴユールはモンジャラを地面におろした。

「じやあ、ソフトクリーム食べに行こう？ しぼりたてモーモーミルク百パーセントのソフトクリーム。とっても濃厚で美味しいんだって」

「……」

「モンジャラ？」

モンジャラは、アヴェユールに背を向けたまま返事をしない。

「……もしかして、怒ってる?」

「もじゃっ!」

否定するように鳴いたモンジャラの声は、ちよつと語気が強かった。

「もく、ごめんね。続きは今晚ゆーつくりしてあげるから。だから、今はせつかくだし。ソフトクリーム食べよう?」

「もじゃ!? もじゃ! もじゃ!」

突然、だーつとモンジャラが走りだす。

「待ってモンジャラ。別に逃げなくても今はしないから。ふふ。もう、モンジャラー!」

モンジャラを追って、アヴェユールも走りだす。

二人が走る牧場の青い空には、モーモーミルクみたい真っ白な雲が大きく広がっていた。

1日目「夜」コガネシティ

——ここは コガネ シティ

ごうか けんらん

きんぴか にぎやか はなやかな まち——

「まだお腹、大丈夫？」

「もじゃ」

「うん。コガネに来たからには、たこ焼きは外せないけど、串カツも食べたいもんね〜……」

アヴユールとモンジャラは、人で賑わう夜の繁華街を歩いていた。

「たこ焼きは二人で食べたらあつという間だったし、串カツいっぱい食べれそう」

「もじゃー」

「ふふ。……たこ焼き。本当に、外はカリツとしてるのに中はとろ〜ってしてて、美味しかったねえ」

「もじゃー……」

「ていうか、たこ大きくなかった？」

「もじゃ」

「あんなたこのおつきいたこ焼き初めて食べたかも」

「もじゃ〜」

「また食べたいね」

「もじゃーっ」

アヴユールは時おり電子端末の画面で道を確認しながら、モンジャラと楽しそうに歩いていく。

「にしても、ギリギリお店開いてる時間に間に合ってたね」

「もじゃー」

アサギシティとコガネシティは直線距離だとそう遠くないが、地上を行くと一度北上してからエンジュシティを経由して南下しなくてはならないので、相当な距離がある。

本来ならばとてもではないが一日で両方とも観光することは難しいのだが、アヴユールはハードスケジュールを組んで、ホテルをとつ

であるこのコガネで夕飯を食べることにしたのである。

「今日はいっぱい歩いたし、よく寝られそー」

「もじゃ〜……」

「明日も早いし、ホテルついたらお風呂入ってすぐ寝たいけど……」
「もじゃ？」

言葉を止めてモンジャラをじっと見つめるアヴュールを、不思議そうな顔でモンジャラが見上げる。

「……約束しちゃったもんね。続きは、今晚するって……」

「……もじゃっ！ もじゃっ、もじゃっ！」

モーモー牧場での出来事を思い出し、モンジャラは慌てて大きな声で鳴く。

「ふふふ。もう、モンジャラったら〜。ふふふ、ふふふふふふふ」

「もじゃ〜！」

「じゃあ、今日はやめておく？」

「もじゃっ！ もじやもじゃっ！」

「そんなこと言っつてー、我慢できるの〜？」

「もじゃっ！ もじやっ！」

「でもー、私が我慢できないかも」

「もじやっ……」

「……ふふ。ふふふふ」

動揺するモンジャラを見て可笑し^{おか}そうに笑うアヴュールは、急に目の前で誰かに立ち止まられて足を止めた。

「ねえ、お姉さん。一人でしょ。よかつたらさ、俺らと一緒にご飯行かない？ おごるよ？」

アヴュールの前には、三人の若い男が立っていた。

「ごめんなさい」

アヴュールはそれだけ言うと、足早にその場を去ろうとする。

しかし、三人はアヴュールの行く手を囲うように塞いで立ちほだかる。

「いーじゃん。俺らこー見えてけっこうお金持ってるよっ！」

「お姉さんお洒落だねー。そのシヨールパンとかちよー似合ってるんじや

ん」

「馬鹿、ヨウスケ。ごめんねー。こいつはちよつとチャラいけど、俺らはそういうんじゃないから。あつ、俺ケンタね。よろしく」

「……あの、私モンジヤラがいるんで」

そう言つて強引に脇を抜けようとするアヴユールの前に、男たちはしつこく出てくる。

「いや、モンジヤラつて」

「いいよいいよ。モンジヤラも一緒にご飯食べよう。おごつてあげるからさ」

「……あの。本当にごめんなさい」

「ちよつと待つてよー」

「うわあ、いてー！」

「もじやつー！」

男の一人がわざとらしくモンジヤラにつまずき、蹴飛ばした。

「ちよつと！ やめて下さい。——モンジヤラ、大丈夫！」

アヴユールがモンジヤラを抱きかかえる。

「ごめんごめん。小さくて気づかなかつたよ」

そう言う男の後ろで、ずっと静観していた男がポケットからゴージャスボールを取り出しポケモンを出した。

「りいきー！」

外に出た「かいりきポケモン」のゴージャスが雄叫びを上げるように鳴き、通行人が迷惑そうにそれを避けて通り過ぎていく。

「出た、リュウジさんのゴージャス！」

「俺のゴージャス、なんで進化させてないかわかる？ ポケモンつて、進化させた方が強くなるけど、進化させない方が成長は早いのだから、あえてゴージャスまでは進化させて、止めてるわけ。ま、進化しないモンジヤラ使つてるお姉さんにはわかんないかもしれないけど」

「リュウジさん、強いだけじゃなくて頭いい〜」

「リュウジさん、ここらじゃ一番ポケモン強いから」

「お姉さん、俺と勝負しようぜ。俺が勝ったらお姉さんにご飯おごつ

てあげるよ」

「リュウジさん優しい。勝つてご飯奢つてあげるとか、男気ありまくりじゃないすか!」

盛り上がる男たちをよそに、アヴユールは少し怒った顔で言う。

「ごめんなさい! 私、ポケモントレーナーじゃないんで! ——行こう、モンジャラ」

そう言つて立ち去ろうとするアヴユールの腕の中から、リュウジに顎で指示されたゴーリキーがモンジャラを強引に引き抜く。小さな悲鳴を上げたアヴユールから引き離され、モンジャラはかたいアスファルトの上に投げ飛ばされた。

「りいきー!」

「やめてください!」

「いーからいーから。ポケモンは戦うもんだからさ。戦わせない方が可哀そうだって。大丈夫大丈夫。じゃあ、ゴーリキー。『けたぐり』!」

「りいきー!」

ゴーリキーは宣戦布告のように叫ぶと走り出し、モンジャラの足元を力強く蹴つて歩道に転がした。

「もじゃー!」

転がったモンジャラはそのまま、見下ろすゴーリキーを見上げる。

そして突然、ぴゅぴゅぴゅつと小さな種をはなった。

「…………りいきー?」

種を足元にぶつけられたゴーリキーはしばし固まった後、小ばかにするように笑い始めた。

「ははは。なんだ今の! お前ら見た!? 可愛いねえ、お姉さんのモンジャラ。何今の、『タネマシンガン』? 『タネばくだん』? あんなちつちえータネ、見たことねえーよ!」

「りいきー」

「モンジャラ…………」

アヴユールは男たちに馬鹿にされるモンジャラを見つめ、小さく呟いた。

「おら、ゴリーキー！ もう一回^{いっかい}けたぐり！」

「りいきー！」

「もじゃー！」

起き上がったばかりのモンジャラは、再び足元を強く蹴られて転がされてしまう。

「おい、どうした？ 反撃してこないの？ さっきの攻撃馬鹿にされて、恥ずかしくって攻撃できなくなっちゃった？ ごめんね。――

ゴリーキー！ 先輩としてちゃんとお手本見せてあげて！」

「……りいきー！」

顔をしかめて不思議そうにしていたゴリーキーは、リュウジに言われて返事をする、無抵抗でひっくり返ったままのモンジャラにさらなる「けたぐり」を浴びせた。

「……もじゃっ」

地面に転がっていたモンジャラが急に起き上がり、ゴリーキーをじつと見る。その時、ツタの中から強い光りが漏れ出し始めた。

「りいきー？」

刹那、モンジャラのツタの中から強烈な光線が放たれ、ゴリーキーの全身を襲う。

「りいきー！」

ゴリーキーは鳴き声を上げ、倒れた。

「……はっ？ 嘘だろ？ おい、ゴリーキー？ ゴリーキー！ 嘘だろおい。一撃^{ワンパン}って……！」

ゴリーキーに駆け寄ったリュウジは動揺し、膝についてゴリーキーを見つめる。

「そんな……。あのリュウジさんのゴリーキーが、一撃^{ワンパン}……？」

男たちの間に動揺が広がる中、ケンタがハイパーボールを出しポケモンを出す。

「ぶーうーばー！」

「なんかの間違いだろ……。リュウジさんが負けるのなんて見たことねえよ。今度は俺の番だ！ あんだけリュウジさんのゴリーキーの攻撃食らってたし、ほのおタイプなら負けるはずがねえ！」

「ちよつと、もうやめて！」

「うるせえ！ いけ、ブーバー！ ほのおのパンチ！」

「ぶーううーばー！」

ケンタの叫びにこた応え、〃ひふきポケモン〃ブーバーはモンジヤラに向かつていくと、燃える拳でモンジヤラを打ち抜いた。

「もじやー！」

モンジヤラは鳴き声を上げて吹っ飛ばされるが、瀕死になることなく起き上がった。

「嘘だろ……。効果抜群だぞ？ んなわけ……！」

動揺するケンタの前で、モンジヤラが身構える。

その時――。

「やめろ、ケンタ」

「リュウジさん……」

「俺たちの負けだ。これが負けじゃなかったらなにが負けだ!? ア!?

クソっ！ これ以上、恥を上塗りすんじゃねえ！」

リュウジはゴリリキーをボールに戻すと、アヴユールを見た。

「……わかるかったな。本当にあんた、ポケモントレーナーじゃないのか？」

「……」

アヴユールが無言で頷く。

「そうか。――モンジヤラも、悪かった。つえーなお前……」

「……もじやっ」

真つ直ぐにリュウジを見返すモンジヤラとしばし見つめ合ってから、リュウジはアヴユールの方に戻り財布を出す。

「これは侘びだ」

「えっ……、いりません！」

「いいから受け取れ！ ポケモンバトルで負けたら賞金を払うのが俺らの流儀だ。侘び代も込みだが、受け取ってくれ」

「……そんな、いりません」

「ちっ！」

リュウジは舌打ちするとモンジヤラの方に戻り、お金をその前に置

いて下がった。

「……悪かったな。——帰るぞ、お前ら！」

「あっ……。はっ、はいっ！」

男たちが去った後、アヴユールはすぐにモンジャラに駆け寄った。

「大丈夫、モンジャラ！」

「もじゃー！」

「すごいよモンジャラ！ モンジャラはやっぱり強いね！」

「もじゃー……」

「待ってね。今すぐポケモンセンターに連れてってあげるから」

そう言っつて電子端末を取り出し場所を調べようとするアヴユールを、モンジャラは止めるように鳴いた。

「もじゃっ！ もじゃー！」

「大丈夫なの？ でも、いっぱい攻撃されたんだし、やっぱり行った方が……」

「もじゃっ！」

アヴユールのリュックサックをツルで示し、モンジャラが鳴く。

「たしかに、「応々きすぐすり」は持つてるけど……」

「もじゃっ！」

「……うん、わかった。じゃあ先、串カツ食べに行く？ 時間もなし……」

「もじゃー！」

「もう、モンジャラは……。……ありがとう」

「もじゃ？」

こうしてアヴユールとモンジャラは、煌びやかな夜の街に串カツを食べに消えていった。

2日目 午前中 キキョウシテイ

——ここは キキョウ シテイ

なつかしい かおりのする まち——

ジョウトにやって来て二日目。

今日もアヴユールは昨日と同じ髪型だったが、八分袖の赤いシャツにデニムのオーバーオールを合わせたコーデに着替えていた。白い広めの襟の下で大胆に丸く空いている胸元を、黒いインナーシャツでしっかりとガードし、全体的に少女らしいかわいさをまとっている。ショート丈のオーバーオールから伸びる綺麗な脚は、白いハイソックスで包みこまれており、口の部分の黒いラインが、アヴユールの綺麗な肌の色と共にアクセントを添えている。

アヴユールたちは今日、朝早くにコガネシテイを出発し、すでに隣のキキョウシテイへとやってきていた。

「すごい。おっきいね！」

「もじゃー……」

池の前で立ち止まって顔を上げるアヴユールとモンジャラの目には、大きな塔が映っている。

「この塔はね、とつても大きなマダツボミが柱になって出来たって言われてるんだって」

「もじゃー」

「ふふふ。ほんとかなあ？」

心なしかいたずらっぽく笑ったアヴユールは、抱きかかえたモンジャラと一緒に写真を撮ると、目の前にかかる太鼓橋に足を踏み出した。

「面白い形の橋だね」

「もじゃー」

太鼓橋とは、太鼓の胴が真ん中に向かうにつれて膨らんでいるように、橋の中央が上に向かって膨らんだアーチ状の橋のことをいう。マダツボミのとうの前にかかる太鼓橋は短く、落ち着いた色合いで派手さはないが、そこには侘^{わび}や寂^{さび}を感じることでできる奥行きがあつ

た。

アヴユールはその中ほどで立ち止まり、はし橋・端から池に目を向けた。

「……………」

モンジャラも足を止め、低い視線を欄干の隙間から池へ落とす。

「……………」

不意にポツポが一匹飛んできて、池のほとりの木にとまった。ポツポはまるで紙の上に描えがかれた浮世絵のように動きをとめ、どこかを静かに眺めている。

「……………なんか、いいね」

「もじゃー……………」

ふと呟いたアヴユールに、モンジャラが優しく返事を返す。

通行人が、アヴユールとモンジャラにさして意識を向けることもなく通り過ぎていく。

とまることなく流れていく時の中で、今ここで、アヴユールとモンジャラだけが立ち止まっていた。景色とポツポもとまっていた——。

「……………」

ポツポが不意に体を震わす。アヴユールの足元で、モンジャラは音を立てることもなく呼吸をしている。水面は静かだが、目には映らない小さな変化を絶えず繰り返し、木々は葉を揺らすこともなく光合成をし、橋は永久とわにも近い速度で音もなく風化してゆく。アヴユールの心臓は、その華奢な体の中で、誰の目にとまることもなくどくんどくとゆっくり鼓動を刻んでいる。

「……………ぽぽーっ」

不意にポツポが鳴いて、飛び去った。

後には何も残さず、後には変わらない風景が残った。

「……………行っちゃったね」

「もじゃー……………」

ポツポの姿はもうどこにも見えないが、ポツポは確かにどこかにいるはずで、今もきつと生きているはずで。でもそれを、アヴユールたちは知る由もない。

「行こっつか……………」

「もじゃー」

二人は再び歩き出した。

*

——ここは マダツボミのとう

ポケモンの しゅぎようを なされよ——

「ねえ見て！ かわいい……！」

「もじゃー」

「マダツボミのとう」の入り口で、悶えんばかりに喜ぶアヴユールを見上げて、モンジャラが優しく微笑む。

そんなアヴユールたちの前には、マダツボミの像が立っていた。

塔の入り口の両脇には、一体ずつマダツボミの像が建てられている。力強いタッチで彫られたマダツボミの像は、その作風とは裏腹に、マダツボミらしい何とも言えないゆるーい表情をしている。

「あつ、ねえ見てモンジャラ！ 柱が揺れてるよー！」

「もじゃー」

思わず抑えた声をほとばしらせるアヴユールの目の前では、塔の真ん中に立つ太い大きな柱がぐわくぐわくと揺れていた。

「外からじゃ全然わかんなかったね」

「もじゃー」

マダツボミの細い胴体のようにうねる極太の柱に、アヴユールとモンジャラは見とれてしまう。

「マダツボミのとう」はね、すっごく昔に、ポケモン修行のために建てられたんだって。でもね、今まで一度も、地震とか台風で倒れたことがないらしいの「

「もじゃー」

「地震とか台風がきても、建物が上手く揺れて振動を逃がしてくれるから倒れないんだって」

「もじゃー……」

「すごいよね。そんな昔に、そんな技術があったなんて……」

「もじゃー……」

しばし柱を眺めた後、アヴユールたちは塔の一階を見て回る。

「今揺れてるのは、上でお坊さんたちが修行してるかららしいよ」
「もじゃー」

「こんなにおっきな柱がこんなに揺れるなんて、どんな修行してるんだろうね……」

「もじゃー……」

一階をじっくり見て回ったアヴユールたちは、最後に二階へと続く階段を前にして立ち止まった。

「ここから上は、野生のポケモンも出るみたいだし、お坊さんたちとの修行もあるらしいし、私たちはやめとこっか」

「もじゃー……」

アヴユールたちは少し残念な気持ちをお土産に、引き返す。

「最上階にはね、マダツボミの絵が飾ってあるんだって」

「もじゃー……」

「実物は無理だけど、後でゆっくりネットで見ようね」

「もじゃー！」

少しお腹が空いてきたアヴユールたちは、ゆらゆら揺れる「マダツボミの塔」を後にした。

2日目「昼下がり」エンジュシティ

——ここは エンジュ シティ

むかしと いまが

どうじに ながれる れきしの まち——

「おつきーねー……」

「もじゃー……」

小さな池の前に立って、アヴェールとモンジャラは、目の前の木々の奥にそびえる高い塔を眺めていた。

「『スズのとう』は、とっても神聖な塔だから、エンジュのジムバッジを持ってないと入れないんだって」

「もじゃー……」

「近くで見えてみたかったねえ……」

「もじゃー……」

しみじみと目の前の塔を見上げていたアヴェールたちの前に、目の前で紅葉している木々から落ちたのであろう、オレンジ色の葉が水面を滑るように漂って流れてきた。アヴェールたちの視線も池に落ちる。

水面には、色鮮やかに彩られた木々と高い高い『スズのとう』が映っている。こんなにも近くにあるのに、手を伸ばしても触れることすら叶わない。まるで鏡花水月のような『スズのとう』。

「ねえ、モンジャラ」

「もじゃー?」

「エンジュジムに挑戦してみる? モンジャラなら、ひよつとしたら勝てるかも……!」

「もじゃっ!」

「昨日も、私にからんできた男の子たちのポケモン、あつという間にやっつけちゃったし」

「もじゃー! もじやもじやー!」

「ふふふ。冗談だよ。も……、モンジャラは真面目なんだからあ」

「もじやー」

「ふふっ」

アヴユールは辺りに漂う空気のように軽やかに笑うと、その視線を再び前へと向けた。

「……………ありがとね、モンジヤラ」

「もじや？」

真つ直ぐに前を見つめてつぶやいたアヴユールが、どこを見ているのか、モンジヤラにはわからない。モンジヤラは、不思議そうな目でアヴユールの横顔を見上げる。

「さあ、写真撮ったら歌舞練場かぶれんじょうに行こう！」

「もじやー」

「舞妓まいしこさん。踊りも上手だけど、ポケモンバトルも強いんだって」

「もじやー」

「バトルしてみる？」

「もじやー……………」

「ふふふ。モンジヤラはポケモンなのに、バトルは好きじゃないよね……………？」

「もじやー」

「いや、ほら。私はポケモントレーナーじゃないからさ。遠慮してるのかなー、とか思ったりもするんだけど……………」

「もじやつ！ もじやもじやー！」

「ふふふ。そつか。モンジヤラは優しいもんね」

「もじやー。もじやもじやー」

「ふふ」

否定するモンジヤラを見つめてうれしそうに笑ったアヴユールは、すつと顔を上げて紅葉に視線を戻す。

「……………紅葉、綺麗だねえ……………」

「もじや？ ……………もじやあー」

急に話題を変えたアヴユールの視線を追いかけて、モンジヤラも池の奥に視線を向かわせる。

「私たちじゃ入れないけど、あの建物を通り抜けるとね。そこから、すずのとう〴〵まで続く短い道があるんだって」

「もじやー」

「『すずねのこみち』って言うらしいんだけど、紅葉がとーっても綺麗ならしいの」

「もじゃー……」

「写真がネットで見れるから、後でお茶しながら一緒に見よ？」

「もじゃー」

モンジャラの返事に微笑みを返し、アヴユールは電子端末を取り出す。

インターネットを使えば、手の平の中に映し出せるのに、決して手に入ることのない遠い景色の写真を見るため、ではなくて。

確かに二人で、全身で感じている今を切り抜くために――。

また一つ、思い出のページを彩る写真が増えていく。

それは、ポケットに入るほどの、君との景色。

2日目「夕方」エンジュシテイ

——やけた　とう

なぞの　おおかじで　やけました

きけんなので　ちかよらないでください——

「……………」

アヴユールはふと、意識を引っぱられて吸いよせられるようにふらつと、エンジュシテイの北西を訪れた。

「……………」

無言で立つアヴユールの眼前には、焼け落ちた塔が建っている。

モンジャラもアヴユールの足元に立って、ボロボロの建物を見つめる。

「すごい……………ね……………」

「もじやあ……………」

塔が火事によって焼けたのはもうずっと昔のことのはずなのに、黒く焼け焦げた壁や柱の残骸を見ると、微かに灰の臭いが鼻を突くような気がした。それほどに、「やけたとう」はそのままの姿でそこに残されていた。

「……………元々はね。　「スズのとう」と対で、　「カネのとう」って呼ばれる塔が建ってたんだって」

「もじやあ……………」

「でもね。　雷が落ちて、大火事になって、そのまま焼けちゃったんだって……………」

「もじやあ……………」

アヴユールの頭に、今日の昼間見た「スズのとう」や「マダツボミのとう」が浮かぶ。

「「カネのとう」も、「スズのとう」とか「マダツボミのとう」みたいに、地震とか揺れには強かったはずなのにね……………。　木造だから、火事で燃えちやうんだね……………」

「もじやあ……………」

夕日を浴びて、燃えているように色づく「やけたとう」。

ふと東の方を見上げれば、そこには今も確かに残っている立派なスズのとうが建っている。どちらも夕日に照らされているのに、その印象は全く異なる。

「なんか、さみしいね……」

「もじゃあ……」

モンジャラが、隣に立つアヴユールの横顔を見上げる。

その顔もまた夕焼けに染まって、いつもとはどこか違う表情になっていた。

「ふふ。ごめんね。なんかちよつぱり感傷的な気分になっちゃった」

「もじゃー!」

「ふふふ。ほら、昔の人が建てた古い建物を見ながら、色んなことを考えてたらさ。なんだかちよつと、切ない気分になっちゃったの」

そう言うと、アヴユールはモンジャラを優しく抱き上げる。すこしくすぐったいツタの感触が、手のひらに優しく響く。

「モンジャラ。昨日も今日も、いーっぱい歩いたね」

「もじゃー」

「楽しかった?」

「もじゃー」

「ふふふ。よかった」

「もじゃー?」

「え? 私? 私もちろん、楽しかったよ」

「もじゃー」

「ふふふ。じゃあ、ご飯食べに行こっか」

「もじゃー」

緩めた腕の中から勢いよく飛び出したモンジャラは、地面に着地するとアヴユールを振り返る。

アヴユールは幸せそうに笑い、歩き出した。

夕焼けに染められた“やけたとう”を背にして、アヴユールとモンジャラは、次の一瞬に向かって一歩一歩、進んでいく。

終わりに向かって、ゆつくりと、歩を進めていく。

2日目「深夜」しぜんこうえん

——いこいの ひろば

しぜん こうえん——

深夜一時半を回った頃。

人気のない公園ひとけの南側にあるベンチに座って、アヴェールはモンジャラと一緒に夜風に当たっていた。

「ねえ、モンジャラ。明日には、帰らなくっちゃだね……」

「もじゃあ……」

アヴェールとモンジャラの前では、鮮やかなピンク色の花たちが、夜の暗がりの中で時折りそよそよと揺れていた。彼女たちの座っているベンチは公園の角にあるベンチで、街灯の明かりはあまりやつてこない。

秋の夜長が、刻一刻と過ぎていく。

「ねえ。もうちよつとだけいよう……」

「もじゃあ……」

アヴェールのはいているハイソックスでは隠しきれない憤まじやかな太ももの上で、モンジャラは穏やかに返事をする。

「……あつ、ちよつと。モンジャラ、くすぐりたいよお」

「もじゃっ！ もじゃあー」

モンジャラがアヴェールを振り向き、申し訳なさそうに鳴く。

「ふふ、大丈夫」

そう言つて微笑むアヴェールの顔を見て、モンジャラは再び花壇の方へと顔を向ける。

「……んっ」

モンジャラの頭をなでながら、アヴェールはモンジャラが気にしないように抑えつつ、くすぐったさで小さく声を漏らした。

モンジャラの全身をおおうブルーのツルには、細かな毛が生えている。だから、ツルに触れると少しくすぐったいのである。

アヴェールはもう何年もモンジャラと一緒にいるため、ある程度は慣れていたが、それでもやっぱり裸の太ももにモンジャラを乗せてい

ると、ちよつぴりくすぐったさに身をよじりたくなることもあるのだ。

「ねえ、モンジャラ。ずっと、こうしてたいね……」

「……もじゃあ」

「でもさ。私ももうそろそろ、彼氏とか、できてもいい歳だよね」

「……もじゃあ……」

「私に彼氏ができたら、こうやってモンジャラと二人つきりで過ごす時間も、きつと減っちゃうね……」

「……」

「もしかしたら、こうやって二人だけで旅行に来るのも、これが最後かもしれない……」

「……もじゃ……」

静かな沈黙が流れる。遠くで微かに虫ポケモンの鳴き声が出たよ
うな、しないような。心地よく体をなでていく風が運ぶ、夜空の雲の
ような、ゆつくりとした時間がながれてゆくようだった。

「……ふふ、ふ」

「……」

「ふふふ。ねえ、モンジャラ。嫉妬した？」

「……もじゃあ」

弱々しく鳴くモンジャラの後頭部に、アヴユールはイタズラっぽい
笑みを向ける。

「さみしくなっちゃった？ ごめんね、モンジャラ。冗談だよ。もう
しばらく、彼氏はいらないかなあ。私には、モンジャラがいるし」

「……もじゃあ」

遠慮がちなモンジャラの鳴き声に、アヴユールは微笑む。

「大丈夫だよ。私がモテるの知ってるでしょー。でも、みんな顔で
よつてくるような男ばつかで、いい人なんてそうそういないからさ。
ゆつくり探すの……」

「もじゃあ……」

「……私。顔以外。魅力、ないのかなあ……」

さびしそうに小さく呟いたアヴユールを、モンジャラはパツと振り

向いた。

「もじやつー！」

「…………ふふ」

目を丸くしたアヴェユールの唇から、笑い声が零れる^{こぼ}。

「ありがとう。大丈夫。…………でもさ、なかなか言えないじゃん。こんなこと。自慢っぽくてさ。嫌味みたいで。そりや、かわいって言われてうれしくないわけないけど、みんな見た目ばかり褒めるんだもん。ちよつと。ちよつとだけ、悲しくなるよね…………」

「…………」

「メイクだつてしてるし。そりやあお洒落も多少は気を使ってるし。…………でも、だから。わがまま言うときあ。そういう見た目だけ褒められても、ちよつと、さみしいよね…………」

「………………！」

「？」

突然、アヴェユールの膝からモンジャラが飛び降りる。驚くアヴェユールから少し離れたモンジャラは、舗装された公園の地面の上で彼女の方を向き直り、体をおおうツタを伸ばして激しく揺すった。全身をおおうツタをアピールするように、モンジャラはツタを伸ばして揺すって鳴いた。

「…………ふつ、ふつ。それ、着飾ってるの。モンジャラ、そのツタ、着飾ってるの。ふふ、ふふふふ。それじゃあ私とおそろいだね」
「もじや〜」

「ふふふ。モンジャラとおそろいかあー。それならうれしいかなあ」
「もじやあく。もじやー！」

可笑しそうに笑うアヴェユールの笑顔を見て、モンジャラはうれしそうに鳴いた。ツタの間からのぞくモンジャラの目も、笑っている。

「はあー、おかしい。…………モンジャラのそういうところ。優しいところ。モンジャラの中身が、私、大好き」

「もじやあく。もじやー、もじやー」

「ありがとう。…………さあ、おいで」

「もじやあく」

アヴェユールはベンチに座ったまま身を乗り出し、両手を出す。そこへモンジヤラがちよこちよこと駆けてくる。

「よいしょ」

再び膝の上に乗ったモンジヤラは、また静かにアヴェユールと花壇を眺める。

「……ありがとね、モンジヤラ」

「……」

風が二人をなでる。アヴェユールがモンジヤラをなでる。時が、そこかしこをなでて進んでゆく――。

3日目「朝」コガネシテイ

——またの

ごりようを おまち してます！——

「んー……」

枕元の電子端末から大音量で流れ出した音楽で、眠っていたアヴユールは目を覚ます。

布団からガバツと飛び出した細い腕が、一直線に枕元へ向かい、端末の画面に触れてアラームを解除しようとした正にその瞬間^{とき}。横から伸びてきたブルーのツタがひよいつと端末を取り上げる。

「……あつ。ねえ、モンジャラあ……。返してえー。止めてえー」

「もじゃー！」

ゆらゆらと宙に揺れる端末から流れる音楽は鳴りやまない。

「もー、わかったからあ。起きるから止めてえ」

「……もじゃ」

モンジャラは枕元に端末を戻すと、ツタで画面に触れアラームを解除する。

「今何時ー？ ……もう九時半？ まだ眠いのにく。起きなきゃー」

そう言つてゆつくりと起き上がったアヴユールの体から、ずるつと布団がずり落ちる。

「もじゃっー！」

慌てて目をそらすモンジャラの前で、眠そうに目をこするアヴユールの体は、かわいらしいパステルカラーの下着しかまどつていなかった。白いレースの装飾がかわいい、あわいブルーの下着がつくる、ひかえめによせられたふくらみの隙間。

「昨日そのまま寝ちゃったもんねー」

そう言つたとアヴユールは、背中を向けているモンジャラを抱きよせ、もう一度ごろんと横になる。

「もじゃあ……」

慎ましやかで綺麗な形のふくらみを顔に押しつけられて、モンジャラが鳴き声をあげる。その振動が胸に伝わり、アヴュールはイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「ねえ、モンジャラ。朝からしちやう？」

「もじゃあー！」

「ふふ、そうだね。今日で帰らなくちゃだし、帰ってもいっばいできるもんね。時間通りチエックアウトして、ちゃんと観光して帰ろ」

解放されたモンジャラは一目散にアヴュールの胸元を飛び出し、ベッドを下りて逃げていく。

「もじゃっー！」

少し怒ったように鳴いて、モンジャラはアヴュールの方を見ない。もちろんそれは怒っているからではなく、アヴュールの下着姿を見ないためだ。

——あれ？——

ベッドを出たアヴュールはふと、寒くないことを不思議に思う。

暖房をつけっぱなしで寝るとノドが乾燥して痛くなってしまうので、タイマーをセットして寝たはずなのに、下着姿でも全然寒くない。

暖房がついている。でも、ノドは痛くない。まるで、アヴュールが目を覚ますタイミングで部屋が温まっているように、時間を見計らってつけたかのようなちよいどいい温度と湿度だ。

「……………」

ツルを器用に動かして荷物をまとめるモンジャラの背中を見ながら、アヴュールは微笑んだ。

3日目「午前中」しぜんこうえん

——きょうは どうようび

むしとりたいたいかが ひらかれます！——

「ストライク、全然いないねえ……」

「もじゃあ……」

出発予定時刻ギリギリでチェックアウトを済ませたアヴェユールたちは今、〃しぜんこうえん〃で〃むしとりたいたいがい〃に参加していた。

ルールは簡単。手持ちのポケモン一匹で、大会専用のボールだけを使い、誰が一番強そうな虫ポケモンを捕まえられるか競うというものである。

火曜日、木曜日、土曜日の週三回しか行われないこの大会に参加するために、アヴェユールは今回の旅行の日程を調整していた。虫ポケモンはあまり得意ではないアヴェユールだったが、せつかなので旅の記念に、何かモンジャラと挑戦してみたかったのである。

——絶対優勝しようね！——。

元気よくそう意気込んでいたアヴェユールだったが、今は心なしか弱気な表情で、〃かまきりポケモン〃ストライクを探している。

「もじゃー！」

突然モンジャラが鳴き声を上げ、背の高い草むらから飛び出してきた緑色のポケモンをツタで示した。

「！モンジャラ。それは、トランセルだよ……」

「もじゃー……」

目の前でかたくなるトランセルを見逃し、モンジャラと一緒に草むらを歩き回るアヴェユール。

そんな彼女の今日のコーデは、くすんだパステルパープルのニットカーディガンに、襟元がかわいい真っ白なシャツを合わせ、少しだぼっとしたジーンパンで脚を包んだオリジナリティーのあるものだった。

「やっぱり、ストライクにはそう会えないのかなあ……」

「もじゃー」

「この公園にいる虫ポケモンで、一番強そうなのはストライクだと思
うんだけど……」

そう言いながら、アヴユールは首から下げた電子端末で時間を確認
する。

残り時間はもうそんなにない。

「うーん……。そろそろ、とりあえず何か一匹捕まえておこつか。
何も捕まえられないまま終わっちゃったら最悪だし……」

「もじゃー」

「うーん……、えい！」

アヴユールはそう言うのと、勢いよく手を振るって草をかき分けた。

「すーぴああー！」

「きやつー！」

アヴユールがかき分けた草むらから、突然 “どくばちポケモン” の
スピアーが飛び出してきた。

「すーぴああつ!!」

気合を溜めるように鳴き構えるスピアーに、アヴユールはあわてて
ボールを投げる。二十個しか貰えない、この大会専用のボールだ。

ボールは見事にスピアーに命中し、地面に落下するとぐらつと揺れ
て、

「……」

——勢いよくスピアーを吐き出した。

「すーぴああ!!」

「ああー!! 捕まえたと思ったのに！」

「すーぴああ!!」

再び自由になったスピアーは、素早く空中を駆け、あつという間に
アヴユールに迫る。

「きやつー！」

「もじゃー!!」

間一髪。スピアーの両腕についたハリの一撃をモンジャラが受け
止め、アヴユールは事なきを得る。

「すーぴああー！ すーぴああつー！」

スピアーのハリの乱舞を、モンジャラは必死で受け止める。

「モンジャラー！」

「もじゃー！」

目の前のスピアーをしつかり視界に収めながら、力強く返事をするモンジャラに、アヴユールはうなずく。

「ありがとう！ 今度こそ……！」

アヴユールがもう一度ボールを投げ、目の前のモンジャラに夢中なスピアーを容易く射止めた。

「お願い……、捕まって……！」

祈るように両手を合わせるアヴユールの前で、ボールがぐらり、ぐらりと揺れ、

「……」

——またもスピアーを吐き出した。

「すーぴああ!!」

再びスピアーの“みだれづき”がモンジャラを襲う。

「モンジャラー！」

「もじゃあー！ もじゃあー！」

大丈夫だと言うように、力強く鳴くモンジャラに元気づけられ、アヴユールはもう一度ボールを投げる。

「今度こそ！ お願い！」

ボールはスピアーを吸い込むようにその中に収め、地面に落ち、三度目の正直、

「……」

——とはならなかった。

「すーぴああー！」

「だめだ。全然捕まらない……」

一度も揺れないボールから飛び出したスピアーを見つめ、アヴユールは早くも取り出したボールを力強く握りしめる。

「すーぴああー！」

スピアーが、そんなアヴユールと無抵抗で攻撃を受け続けるモン

ジャラをあざ笑うように「きあいだめ」をして見せる。

——この大会では、捕まえたポケモンが弱ってない方が、貰えるポイントも高いんだって。ネットの噂だからほんとかどうかはわからないけど、できれば戦わずに捕まえないね!——。

モンジャラは、先ほどアヴユールがそう言ったのを覚えていて、あえて一度も反撃せずに攻撃を受け続けていた。

「……ありがとう、モンジャラ!」

アヴユールはそう呟くと、力を込めてボールを投げた。

力んだ投球は少しカーブをえがき、油断していたスピアーの重心を捉えた。

「お願い……!」

「もじゃっ……!」

二人の祈りが重なる前で、ぐらり、ぐらりとボールが揺れて、

「……!」

——カチリと小さな音を響かせると、ピタリと動かなくなった。

「……やったー!」

「もじゃー!」

「捕まったよ! ねえ、捕まえたよ! モンジャラ!」

「もじゃー!」

「やったね? やったね! モンジャラ!」

「もじゃ〜! もじゃ〜!」

「ふふ、ふふふ……。うれしいね?」

「もじゃー!」

ひとしきり喜んだあと、アヴユールはボールに向かって駆けていく。

とてとてとその後ろをついてくるモンジャラを振り返り、「やったね」とにつこり微笑んだアヴユールの目が、突然それで硬直する。

「もじゃー?」

アヴユールの視線の先を追って振り返ったモンジャラも、驚いて目を丸くする。

「……すううとら〜く〜」

「もじゃあ……」

アヴユールたちと共にぎわつく会場内で、職員がひとときわ大きく声を張り上げる。

「そして！ 今回の大会、一番の優勝者は……」

「……」

「……」

アヴユールとモンジャラが固唾をのんで次の言葉を待つ中、職員がその結果を発表する。

「スピアーを捕まえたアヴユールさん！ 得点は三三六点でした！」

「……うそ」

アヴユールの瞳が大きく開いてゆらつとゆれた。

「もじゃー！」

うれしそうに鳴いてアヴユールを見上げるモンジャラに、かたまっていたアヴユールが微笑みかける。

「やったね！ モンジャラ、やったよ！」

喜ぶ二人は笑顔の職員に呼ばれ、他の入賞者たちと共に前に出て商品を受け取る。

「—— 一番のアヴユールさんには『たいようのいし』をさしあげます」

「ありがとうございます！ ——やったね、モンジャラ！」

「もじゃー！」

うれしそうに『たいようのいし』を握りしめるアヴユールと、それをやっぱりうれしそうに見上げるモンジャラ。

「次の大会も頑張ってくださいね」

公園の職員はそう言って大会を締めくくった。

*

大会が終わって——。

「やったね、モンジャラ」

「もじゃー」

二人は『しぜんこうえん』のベンチに座って一休みしていた。

「だいじょうぶ？ スピアーの攻撃、たくさん受けちゃって。痛かつ

たよね……………?」

「もじやー!」

元気に返事をするモンジヤラに、アヴユールはリュックサックから取り出した「キズぐすり」を使って優しく手当てをする。

「私ね、モンジヤラと絶っ対に優勝したかったんだ」

「もじやあ」

「モンジヤラと参加したら、きっとそれだけですっごく楽しいだろうなって思ったけど……………。本当に、それだけですっごくすっごく楽しかったけど……………。でもね。だからこそ、絶対に優勝したかったの」

「もじやー……………」

「ふふふ。なーんてね。はい、おしまい」

アヴユールは幸せそうに笑うと、モンジヤラの手当てを終わって道具を片付けた。

そして、リュックサックにしまってた「たいようのいし」を大事そうに取り出して、モンジヤラと一緒に眺める。

「すごいね……………」

「もじやあ……………」

「帰ったら、どこかで加工して貰って、アクセサリーにして貰おう?」

「もじやー!」

「髪飾りみたいにして、モンジヤラのツタに付けよっか? このへん。どーお?」

「もじやー……………。もじやっ!」

モンジヤラはそう鳴くと、ツタで「たいようのいし」の真ん中をつーつとなぞった。

「えっ。半分こにするの?」

「もじやっ!」

「えー、もったいないよお……………」

「もじやー……………」

残念そうに鳴くモンジヤラを見て、「たいようのいし」を見て、アヴユールはしみじみと言った。

「……………でも、そうだね。二人で大会に参加して、優勝して、貰った石

だもんね。半分こにして、おそろいでつけよっか？」

「もじゃあ〜！」

「ふふふ………」

アヴユールは微笑むと、大事そうに“たいようのいし”をリユツクに戻し、立ち上がった。

「じゃあ、そろそろ行こっか」

「もじゃー！」

モンジャラもぴよんとベンチから地面に降りる。

あたたかなお昼の日差しの下を、二人はゆっくりと歩き出す。

それぞれの一步、それぞれの時間を重ねて。おそろいの思い入れ、おそろいの思い出が、また一つ。

3日目「夜」41ばんすいどう？

——ここは アサギ みなと

こうそくせん のりば——

「……………」

決して広くはない格安の客室で、ベッドに腰を下ろし、アヴユールは静かに壁の方へ視線を落としていた。

しばらく前に「アサギみなと」を出発したこの船は、今頃「うずまきじま」と「コガネシティ」の間を南下している頃合いだろうか。膝の上にモンジヤラを乗せたアヴユールは、窓のない壁の先に真っ暗な海を望むように座っていた。

「もうしばらくしたら、ジョウトともお別れだね」

「もじやあ……………」

細長い部屋の中を、しみじみとした空気が満たしている。

「……………」

「……………」

モンジヤラもアヴユールも、喋らなかつた。

特に何か、理由があるわけではなかつたけれど。ただ、なんとなく、

二人は黙っていた。

旅の余韻にひたるように、旅の終わりの寂しさにひたるように。ただ、二人は静かに前を向いて座っていた。

「……………ねえ、モンジヤラ。楽しかった？」

「もじやー！」

「ふふ。よかつた……………」

うれしそうに微笑んだアヴユールを、膝の上でモンジヤラが振り返る。

「もじやー？」

「うん。私も楽しかった」

「もじやー！」

二人はなにげない言葉をかわして、なにげない幸せをかさねて、なにげなく微笑み合った。

「…………お風呂、行くっか」

「もじゃー!」

アヴェユールに優しく頭をぽんとされたモンジャラは、膝の上からぴよんと飛び降りる。

「帰りもオーシャンビューらしいよ? あっ! コガネの夜景、見れるかな?」

「もじゃー」

お風呂セットを準備するアヴェユールの手が急ぎ出す。

「せっかくだし、見たいよね。急がなきゃ…………」

「もじゃー」

焦るアヴェユールをなだめるように、モンジャラが優しく鳴いた。

「うん、大丈夫。行こう」

「もじゃー!」

アヴェユールとモンジャラは客室を出て、大浴場へと向かった。

残りわずかなジョウト旅行を、まだまだ楽しむために。

——人とポケモンが二人、旅してる。

——船の窓から星が見える…………。

THE END

あとがき

読んで下さった方、ありがとうございます。

不快にってしまった方、申し訳ございません。

私が観測して、素敵だなあと、文章という形に起こさせて頂いた「アヴニールとモンジャラの旅行」の断片を。みなさんにも楽しんで頂けていたなら、うれしいなと思います。

改めまして――。

読んで下さった方、ありがとうございます。

不快にってしまった方、申し訳ございません。

皆様の人生が幸せなものでありますように――。